

土岐善麿短歌賞

連作の部

【佳作】

「余命二時間」

古地 陽一

誘蛾灯 傷の行方も知らぬまま加爾基水の香で満たす弾倉

（水槽のなかの橙の尾鰭は浮かんで）おはよう、プール用具要る

Star mine 拍手喝采が云うにはあの星はぼくのものじゃないらしい

織姫と彦星ですら年一で会うのにぼくはおれに会えない

「人類は火を使って生きてきました」線香花火が落ちる音を聴く

アダムインザステーション ねえ、缶コーラを買う後悔、いまの空は何色？

太陽はいつの間にか橙から白に変わった 花弁も切られた

夕立は夏の断末魔のように 朝日は街を恐れるように

基礎合奏します 八拍ハミングで、次に八拍で愛を叫んで

泣き声に埋まる帰り道のバスで止まぬ耳鳴りがH^へであること

二時間後には切れてほしいエアコンの余命をちよつと確かめる おやすみ

はつなつの生徒らは子宮を巣立って子宮へ帰る午後四時の月

十八になった日にポルノを借りてみておれもこの肌色を貰った

終電の二号車両に客として蟬が舞ってからやつとひとなつ

夏掛に冷気のしみが残るままおれのサナトリウムはさみしい